



ドクター板東の メディカルリサーチ

~音楽のパワー確認 ドイツにて~

Vol. 89

<http://pianomed-mr.jp/>

101歳の医師・日野原重明先生を存じだろうか。医学や音楽療法、「新老人の会」などの領域で、長年指導くださっている。その中で、2年前は台北を訪れ、コンサートと音楽療法セッションを実施した。

今回はドイツ訪問の企画に。メンバーは「新老人の会」13名とピアニスト11名で、計24名である。

活動内容は、日独親善ピアノコンサートが2カ所、音楽療法の受講が2大学だつた。また、ベートーヴェン・ハウスやゲーテ記念館も訪問でき、意義深い出張となり簡単に触れたい。

日本とドイツの絆

今般、私たちがベートーヴェン・ハウス（ボン）に訪問させて頂くとあらかじめ連絡した。すると、「日本の徳島から音楽の親善使節団が来る」ということで、最大級のおもてなしを受けされることに。

詳細を聞くと、本館では、交響曲「第九」が徳島県の板東で初演されたことや、



図2



図4



図6

ドイツ人俘虜収容所の活動について「独日特別展」が以前開催され、大きな反響があつたという。その後、展示物をオールカラーで掲載した書籍が出版された（2011、図1）。

当日、著者のニコレ・ケンプソン博士とピアニストで翻訳担当の寺島康代さんがご講義下さることに（図2）。約100年前の縁の

品々を目の当たりにして感激。子供たちも日独の歴史を肌で感じられたと思う。

カリヨンが響く

フランクフルトの中心には市庁舎（図3）があり、広場の一角には教会が（図4）。高い塔の最上部に設置されているのが、多数の鐘で音楽を奏てる「カリヨン」だ（図5）。まず日本ではお目にかかるない。

なお、カリヨン（carillon、組み鐘）は英語やBell、フランス語でCloche（クロシユ）、ドイツ語でGlocke（グロッケ）とも呼ぶ。



図1



図3



図5

ドイツの各都市で、教会から響きわたるカリヨンの音楽は重要で、田島裕子氏の演奏を拝見させて頂いた（図6）。ピアノと同様に強弱や揺らぎ、バランスが必要とされる。

ド

イツの各都市で、教会から響きわたるカリヨンの音楽は重要で、田島裕子氏の演奏を拝見させて頂いた（図6）。ピアノと同様に強弱や揺らぎ、バランスが必要とされる。

病院「ハカーム

マルクス病院 (Markus Krankenhaus、図7) のホールにおいて、国際交流友好コンサート (friendship concert) を行った。プログラムの構成は、クラシックや近代のピアノ曲が基本となる（図8）。

筆者は「ラプソディ・イン・ブルー」を演奏。さらに、ドイツで広く知られる歌曲の「野ばら」（ゲーテ作詞）に加えて、メンデルスゾーンの「歌の翼に」なども皆で披露した。特筆すべきことは、5歳男児がドイツ語で「故郷を離れる歌」を歌うと聴衆は驚嘆。涙する老夫婦も少なくなかつた。



図8



図9

DAS KRANKENHAUS
Gebündeltes Know-how an einem Ort

図7

また、「新老人の会」会員と一緒に「花」や「ふるるる」を合唱し、日本の美しい音楽や東洋の心をドイツの皆さんにお届けさせて頂いた（図9）。交流会でも、芸術文化医学の分野で親交を深められた。

音楽療法の講義

日本の音楽療法を発展させてこられたのは、日野原先生である。今回我々は、



図11

音楽療法士のアカデミーとして有名な SRH Hochschule Heidelberg を訪れ、音楽療法の概説・動向について Hillecke 教授、Wilder 教授から講義を受けた（図 10～12）。本施設は欧州で最も多くの音楽療法士を毎年輩出し、教育システムが



図10

完備されているようだ。

次に、ドイツで最も古く設立されたハイデルベルグ大学（1386年）を訪問。音楽心理学講座で、著名な音楽療法士・Rittner 教授からワークショップを受講した。（図 13、14）。モノ



図12

コード (Monochord) と弦楽器を共鳴させて、深層心理にアプローチする治療法を体験。また、スピーカー内蔵の椅子や、アジア由来の銅鑼（ドラ）など楽器

をうまくセッションで使用し、実践を重ねていた。

今回ドイツで演奏し歌い、音楽療法を学んだ。ゲーテの国でもあり、言葉を大切にする。さらにメロディが合わさると、心の各レベルにも直接働きかける。国を問わず、音楽には偉大な力が内在していると思う。

（板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト）



図13



図14